

資料

2020年度における生物（動物関係）に関する問い合わせ状況

中島 淳・石間妙子・埴 麗文・金子洋平・須田隆一

当所で窓口依頼検査以外で回答した動物に関連する問い合わせの内容について概要をまとめた。2020年度は電話や持ち込み、電子メールによる質問が49件であった。問い合わせは県庁各課・保健福祉環境事務所・県警察等の県機関から22件、市町村から11件、民間業者から1件、一般県民から15件であった。前年度3件の問い合わせがあった特定外来生物ヒアリ類疑い種の同定依頼は4件、前年度11件であったゴケグモ類疑い種の同定依頼は6件であった。また、同じく特定外来生物のツマアカスズメバチ疑い種の同定依頼は1件であった。

[キーワード：衛生害虫、ペストコントロール、アリ、ハチ、クモ]

1 はじめに

当所では窓口依頼検査として生物同定試験を実施しているが、それ以外にも日常的に電話や持ち込み等による生物に関する問い合わせに答えることが多い。本報では2020年度に寄せられた質問のうち、動物に関連するものについてその内容をまとめた。

2 方法

動物に関連する各問い合わせについて、依頼元を県、市町村、民間業者、一般県民、その他の5つに区分した。また、質問内容については一般的な不明種に関する同定依頼、ゴケグモ類疑い種（セアカゴケグモ、ハイイロゴケグモ）の同定依頼、マダニ類疑い種の同定依頼、ツマアカスズメバチ疑い種の同定依頼、ヒアリ類疑い種（ヒアリ、アカカミアリ）の同定依頼、生物多様性・外来種に関する一般的な質問、その他、の7項目に区分して整理した。

3 結果及び考察

表1に2020年度の月ごとの問い合わせ件数を示す。全体で49件の問い合わせがあり、最も問い合わせが多かったのは10月の10件で、次いで6月が9件、9月が6件であった。全体の問い合わせ件数は2010年度が24件、2011年度が24件、2012年度が57件、2013年度が68件、2014年度が52件、2015年度が51件、2016年度が55件、2017年度が54件、2018年度が57件、2019年度が62件であり、問い合わせ件数はやや少なかった。

図1に問い合わせの依頼元と件数を示す。問い合わせは県機関からのものが最も多く、県機関では保健福祉環境事務所からの問い合わせが多かったが、ほぼすべての場合において所管市町村または県民からの質問の仲介であった。市町村からの依頼も同様に一般市町村民からの質問の仲介であった。依頼元の傾向は過去と比較して、大きな違いはなかった。

問い合わせの具体的内容は不明種に関する同定依頼が30件と最も多く、次いでゴケグモ類疑い（6件）が多かった（図2）。ゴケグモ類疑い種として問い合わせがあった6

表1 各月における内容別の問い合わせ件数

質問内容	月												計
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
不明種同定依頼	2	2	9	2	1	2	7	1	2	1	1		30
ゴケグモ類疑い	1				1	3	1						6
マダニ類疑い													0
ツマアカスズメバチ疑い							1						1
ヒアリ疑い	1				1	1	1						4
生物多様性・外来種									1				2
その他		2						1	1	1	1		6
計	4	4	9	2	3	6	10	2	4	2	2	1	49

件のうち、セアカゴケグモであったのは3件で、その他はジグモ（1件）、マダラヒメグモ（1件）、イエオニグモ（1件）であった。また、ヒアリ類疑い種として問い合わせがあった4件はいずれもヒアリではなく、ヒメアリ（2件）、キイロシリアゲアリ（1件）、オオアリ属の一種（1件）であった。ツマアカスズメバチ疑い種として問い合わせがあった1件は、コガタスズメバチであった。

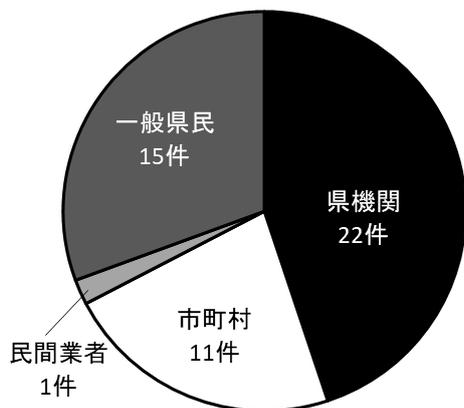


図1 2020年度における問い合わせ元の件数

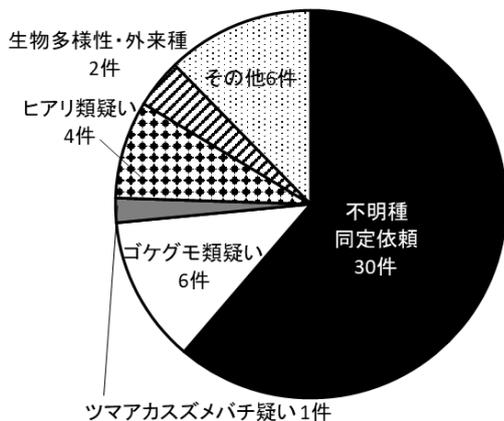


図2 2020年度における内容別の問い合わせ件数

不明種同定依頼において種まで同定できたのは、シロマダラ（3件）、ヤマカガシ（3件）、ニホンヒキガエル（2件）、タヌキ、アナグマ、アライグマ、イノシシ、ヒドリガモ、カンムリカイツブリ、コウノトリ、ハイタカ、ヒヨドリ、サバンナモニター、セマルハコガメ、ワニガメ、コ

シボソヤンマ、ネアカヨシヤンマ、コオイムシ、オバボタル、クロキオビジョウカイモドキ、タカサゴキララマダニ、アマミサソリモドキ、スジエビ、オオクビキレガイ、オオマリコケムシが1件ずつであった。このうち、ヒドリガモ、カンムリカイツブリ、ハイタカは県域で死亡していたもので、鳥インフルエンザ検査対象種としての同定依頼に対応したものである。

本年度は10月に篠栗町でシロマダラが確認され（今回の3件のうちの1件）、珍しいへびとして大手メディア等で報道された結果、その後に新宮町と福岡市中央区からも相次いで同定依頼があり、いずれも本種と確認された。また、3件のヤマカガシについても、シロマダラ疑いとして同定依頼のあったものである。

ペットの遺棄・逸出由来としてはセマルハコガメ、ワニガメ、サバンナモニターが各1件ずつあり、このうちワニガメは大川市の水路で生きた個体が、サバンナモニターは久留米市で死んだ個体が、それぞれ発見され当所で同定を行ったものである。セマルハコガメについては警察署からの写真による同定依頼で、発見場所等の詳細は不明である。

また、10月には久留米市（田主丸町）において生きたサソリモドキ類の成体1個体と幼体2個体が発見され、当所に持ち込まれた。いずれも外部形態の特徴からアマミサソリモドキと同定された。幼体が複数発見されたこと、久留米市職員による発見場所周辺での聞き取り調査では以前から見かけていたとの住民からの情報が得られたことから、すでに定着している可能性が高い。本種は福岡県内では外来種であり、すでに糸島市において定着が報告されている²⁾。植木や資材等に紛れて人為的に持ち込まれたものと思われ、今後の生息状況に注意する必要がある。

本報をまとめるにあたり、クモ類の同定に際してご教示いただいた馬場友希博士（国立研究開発法人農業環境技術研究所）、爬虫類の同定に際してご教示いただいた田原義太慶氏、アリ類の同定に際してご教示いただいた細石真吾博士（九州大学）にこの場を借りてお礼申し上げます。

文献

- 1) 中島 淳、石間妙子、埴 麗文ら：福岡県保健環境研究所年報，47，107-108，2020.
- 2) 今泉晃、唐沢重孝：Edaphologia, 96, 19-20, 2015.